

読書の方法と無方法——なぜ読めないのか

「難しい」文章や本を読むのが苦手な人というのは、何が苦手なのだろうか。

その理由をはっきりしている。「難しい」本を読めないのは、順追って最初から読んでいこうとするからだ。どの一行にも意味があると思って（もちろん意味はあるのだが）、そしてまた後の行、あるいは後の段落は、最初の行や最初の段落を理解しなければ理解できないと思って、最初からきまじめに読もうとする。そして「こりゃあ、ダメだ」と言って投げ出す。これではどんなに自己研鑽を進めても「難しい」本は読めない。

「わかる」箇所からこじ開ける

すべての文言が理解できる本などというものは、ほとんどあり得ない。「本が読める人」というのは、むしろ読み飛ばすことができる人のことを言う。どんな難しい本も、必ず二行や三行くらいは「わかる」。文章に出会うことがある。そういった二行や三行が五頁おき一〇頁おきに一箇所、二箇所

必ず存在している。そういった「わかる」箇所を一つ、二つと見出し始めていくと、従来わからなかった箇所の一部までもがなんとなくわかってくる感じがする。点が線で結びついていく。そうやって、こじ開けるようにして難しい本を読み開いていく。それが読書だ。

本を読める人というのは、すべてがわかる「賢い人」なのではなくて、わからないことを恐れない人のことを言う。わからないところで断念するのではなくて、飛ばして先に進む勇気があるかないか、それが読書の境目。本を読めない人は、わからないところが出てくるとすぐにそれで諦める。誰が読んでもわからないものはわからない、そう思えないのが本を読めない人の特徴。

本の「全体」とか「部分」というのは、機械の部品（の集積）のような全体でも部分でもない。一行の文章がその行を含む一冊の書物の全体を表現している文章であることもあるし、どの行もどの言葉も均質の意味を有し続けている全体であることもある。それはどちらにしても最初とか最後という時間性を拒否しているのである。

始まりも終わりもない書物

言葉を読み込む、文章を読み込むということに最初もなければ最後もない。点を線に繋いだり、線を点に戻したりしながら、一つの同じ言葉が、一つの同じ文章が何回もその意味を変えていく様（さま）を体験すること、それが読書だ。

だから、文章の「全体」に始まりも終わりもない。どこから読んでも読み終わるのが文章というもの。古典的とも言われる「名品」の書物ならなおさらのこと。ダメな文章ほど、因果（あとさき）に縛られ、ストーリーに縛られている。直木賞の文学が芥川賞の文学に差をつけられているとすれば、三流の文学は因果的だということに他ならない。

推理小説が文学としてくだらないのは、二回目を読む興奮は最初に読む興奮よりも半分以下になっているからである。推理小説を後ろから読むことは危険この上ないことだし、飛ばし読みも難しい。推理小説がもし本気で〈文学〉でありたいとすれば、二回目に読むと「犯人」が別の人になるくらいの「工夫」がなければならぬ。三回目にはまた別の「犯人」が登場するということになる。

大概の古典は何回も「犯人」が変わる推理小説のようだ。私の二〇代後半はヘーゲルの『大論理学』、ハイデガーの『存在と時間』を読むことに明け暮れていた。なんと読んでも「犯人」が見つからない。最高の文学＝哲学だ。

何回も読み直せるかどうかはその文学を本質的なものにする。それが始まりも終わりもない書物や文学の本質を言い当てている。だから本来の文章にはアプローチの作法というものはない。三流の文学や思考、そしてまた官庁の白書、そしてまた区役所の広報情報、そしてまたリクルートの情報誌こそが丁寧に（あとさきを間違えずに）読まなければ「意味がわからない」文章にあふれており、不自由な「読書」を強いる。

それに比べて、自由な文学（文章）は自由な読書を可能にする。行儀良く読む必要などまったくな

いのである。

（初出・二〇〇六年四月七日）

テキストを読むとは、何を意味するのか

——福沢諭吉『独立のすすめ』感想文コンクールの審査結果が発表されました

猪瀬直樹さんと一緒に最終審査した表記の感想文コンクールの審査結果が公表されました。

第一位と第三位までは、猪瀬さんとまったく評価が異なり、調整に大変でしたが、最終的には、猪瀬賞と芦田賞とを設置し、なんとか合意形成できました（苦笑）。

私の講評は以下の通り。

すぐに自分の意見を述べるな

久しぶりに中高生たちの文章に触れて感じたことは、「自分の意見」を〈言う〉こととテキストを〈読む〉こととの乖離感だ。すぐに、「自分の」評価を下し、すぐに「自分の」意見を述べてしまう。「自分の」意見を述べる前に、福沢諭吉自身が『学問のすすめ』の中で何を言おうとしているのかの読み込みが足りない。そもそも「自分の」意見と思えるものも、先人の形成した文化の中で培われて

きたものだ。テキストを読むことと「自分の」意見を述べることとは、特に異なる作業ではないことを理解する必要がある。

優れたテキストであればあるほど、すべての議論をそこに蔵したものであって、その議論を読み込むことが「自分の」意見の処理の仕方を教えてくれる。優れたテキストとは、「自分の意見」の出番がないほどに先行的で内面的な議論を反復してくれるもののことを言うのだから。

さらに気になったのは、「ここは賛成する」「ここは同意できない」というように、まるで会議の議論をするかのように「自分の」意見を言う文体が多かったこと。〈テキストを読む〉ということがまるで心理主義的な賛否を巡って行われるように錯覚している中高生が多かった。テキストは「同意」「非同意」を巡って心理主義的にアプローチすると何も見えてこない。というのもテキストは心理主義的には声を上げないからだ。いつも沈黙しているからだ。

テキストの〈像〉を理解せよ

これはいったい何なのだろう。〈テキストを読む〉ことは、賛成、反対の以前に、なぜそういうことを言うのか、という問いが先立たねばならない。これは、死者の声を拾うような孤独な作業だ。しかし、その声こそ騒々しく、どんな現在の対話よりも活発で質の高いものである。それがわかることが〈テキストを読む〉ということだ。